

# ヒュレーと生命

## —唯識思想と現象学との比較を踏まえて—

阿 部 旬

エドモンド・フッサールは意識構造の研究において、意識の向こう側に構築された現象と、生きる身体を通して構成される現象そのものの差異について言及する。ヒュレーという用語は、ノエシス・ノエマを始め、彼の初期著作『イデーニ I』に登場する言葉である。現象学的還元という方法論によって基礎的意識構造は明らかになったものの、生き生きとした感覚データを生み出すところのヒュレーの層は、反省意識では還元されえない故に、現象学的残余としてフッサールの躓きの石となる。発表においては、「フッサールと現象学的還元」、「メルロ・ポンティの生活世界における身体」、そして「唯識における生き生きとした意識」の3つの視点から、残されたヒュレーの問題に対してどのように取り組むべきなのかを比較検討する。

まず「フッサールと現象学的還元」では、初期の静的現象学による客観性の構造解明から、中期の形相的現象学において主観性の構造が探求されることで、徐々に問題圏がノエマ側からヒュレー側に移行し、物的身体と区別された、生き生きとした身体が重要視され、後期の発生的現象学につながる経緯を説明する。フッサールの用いた還元法は主観・客観と言った二元概念を超越する問題を切り開ききっかけとはなったが、同時に生き生きとした現象をも超越論的意識の内に閉じ込めるが故に、それ以上の遡行を不可能にしてしまう。次の「メルロ・ポンティの生活世界における身体」では、彼が還元法を否定し、最初から身体に焦点を当て、先客観、先反省、先言語思考の領野を探究する中で、主語も目的語もない「それが知覚する」としか言いようのないレベルでは、知覚されるものと知覚するものが侵食しあって互いに表裏になっていることを発見し、ヒュレーがもはや物質などではなく、生活世界と意識世界間の蝶番として両世界間に開かれているものであり、その世界には生きる主体が物的身体を持って共存しているという前提を事実として可能にしていることを提示する。しかし彼の実存主義的現象学における顕現せざるものの研究も、最終的には非論理的、非合理的な事柄の論理的な叙述という問題に突き当たるのである。そこで3番目の「唯識における生き生きとした意識」ではその問題を解明すべく、瑜伽派仏教の唯識説を例示する。唯識が奢摩他・毘鉢舍那と呼ばれる修行と、顕現するものを叙述することで隠れたヒュレーの層を如実に示していることを、特に唯識における原典ともいえる『解深密経』から阿陀那識の概念を使って証明する。阿陀那識とヒュレーは共に、身を以て絶え間なき生の流れを維持していることを証し、決して反省意識から還元されることはない。身体と生きる場が一つになる領域が誰にでも開かれており、そうした生の営みの領域においてヒュレーは物質などではなく、生の、純粹意識の本質であることを解明していく。結論として、ヒュレーの問題圏に取り組んだフッサール、メルロ・ポンティ、そして唯識の見地を比較考察することで、現象学的還元を代わる方法論を提議するとともに、それらがさらなる生き生きとした事象や、新たな現象学的問題にも適応するか否かの検討の必要性があることも喚起するものである。

(大学院文学研究科宗教学専攻博士後期課程)